

桑名・白河・行田との関係

桑名市と白河市と行田市の関係は、約180年前に遡ります。

文政6年(1823)3月、幕府の突然の命令で、桑名藩松平(奥平)家が忍(現在の行田市)へ、忍藩阿部家が白河へ、そして、白河藩松平(久松)家が桑名へ国替えとなりました。江戸中期以降の国替え、まして、三藩間の大掛かりな国替えは異例です。この背景には松平定信がおり、彼の強い意向を受けての国替えであったといわれます。

どの藩にとってもこの国替えの命令は青天の霹靂で、桑名藩内では藩札の交換のことで暴動まで起きました。移封は、藩主はもとより藩士とその家族、藩主の菩提寺等が全て移りますので、荷造りなどの作業の他、新しい住居の手配や引越費用の調達など大変な負担でした。

桑名から忍への引越費用は、全国的に名の知れた桑名の豪商山田彦左衛門が一手に引き受けたといわれます。奥平松平家の家臣で歌人でもあった黒沢翁麿は、この時の顛末を書いた『移封記』を残しています。

白河から桑名へ国替えとなった久松松平家は、桑名藩第5代藩主定綱(さだつな)、6代定良(さだよし)、7代定重(さだしげ)まで、75年間桑名を統治していましたが、宝永7年(1710)越後高田(現在の上越市)へ移封となり、その後白河に移封となり、この時また桑名に戻ってくるという変遷をしています。

松平定信(1758～1829)は、8代将軍吉宗の次男田安宗武(たやすむねたけ)の7男生まれました。安永3年(1774)白河藩主松平定邦(さだくに)の養子となりました。老中首座となり寛政の改革を行ったことは有名です。文化9年(1812)隠居し、嫡子定永(さだなが)が藩主となりました。文政6年(1823)の移封時の藩主は定永で、定信は、楽翁・風月・花月などの号で著述などに明け暮れる毎日でした。定信が公式的に桑名を訪れたという記録は、今のところ見つかっていません。しかし、先祖の墓所には参拝したと思われるので、非公式には桑名に来たと想像できます。

国替えは、藩全体が移動しますので、藩の政策の変換は勿論ですが、風俗・習慣や文化にも新しい息吹が吹き込まれます。奥平松平家が移封した忍(行田市)では今でも「桑名弁」が聞かれるように、桑名には白河と共通点が多くあります。その中でも顕著なものは定信の精神の継承でしょう。定信と桑名との関係は、彼が隠居してからという関係もあると思いますが、桑名では「楽翁」と親しまれています。藩校立教館は定信が白河で創建し、桑名に移されましたが、現在小学校がその名称と、教科の一つであった「打毬戯」(だきゅうぎ)を伝承しています。市指定民俗無形文化財の「詩かるた」も白河からもたらされたものです。また、定信はじめ桑名藩の資料が多く桑名市博物館に収蔵されています。

忍から白河へ移封した阿部氏については、老中を出している名門であるにも関わらず、直接関係なかったためか、残念ながら桑名では殆ど知られていません。

3都市交流が実現すれば、今後文化・芸術・観光・スポーツ等あらゆる分野でより理解が深まっていくことでしょう。

桑名藩

木曾三川と伊勢湾の水運の要、尾張藩の守り、外様大名津藩の監視、彦根藩とともに京都からの往還の監視など交通の要衝を担った桑名に、家康は腹心の本多忠勝(10万石)を配しました。彦根藩には、四天王の一人井伊直政の子を配しています。本多家の後も家門の久松松平家(11万石)及び奥平松平家(10万石)を藩主としています。

白河藩

奥州の入口として重要な位置を占めていました。藩主の変遷は次の通りです。

丹羽長重(10万石)→丹羽光重二本松に移封

榊原忠次就封(四天王康政の子)就封(14万石)→忠明姫路に移封

本多忠義就封(12万石)→忠平宇都宮へ移封

松平忠弘(桑名8代藩主忠雅の祖父)就封(15万石)→忠弘山形へ移封

松平直矩就封(15万石)→明矩姫路に移封

松平定賢就封(11万石)→定永桑名に移封

阿部正権就封(10万石)→正外棚倉に移封

忍藩

幕府直轄領や小大名の領地が複雑配されていた関東八州の要の一つとして置かれた藩で、主として老中を務める家柄の大名が配されました。

松平忠吉(家康の子)就封(12万石)→忠吉清洲に移封

酒井忠勝(老中)就封(5万石)→忠勝川越に移封

松平信綱(老中)就封(3万石)→信綱川越に移封

阿部忠秋(老中)就封(5万石後10万石)→正権白河に移封

松平忠堯就封(10万石)